新川通信 第16号

題　字 ： 佐藤 大作

令和５年４月15日発行

巻 頭 言

未来につながる笑顔のために

世話人　綱本 麻利子

１、Smile Story

「わたしたちは、未来の笑顔づくりのため、地域に必要で革新的な仕組みを創造します」という理念のもと、2020年６月15日に、子育て世代の主婦２人で一般社団法人スマイルストーリーを設立しました。

設立以前には、ご縁をいただき入会させてもらった越後新川まちおこしの会の皆様と一緒に活動していく中で、たくさんの気づきがありました。

新川開削は当時の課題を解決しただけでなく、**強い開削精神が存在しており、開削に携わった当時の人の心が今日につながっていること、人間が生きていくための環境は、決して機能や経済効果だけで成り立つものではなく、「記憶」が糧となり、未来に伝承されていくものだ**と、活動を通じて信念が生まれました。

そして、これまで教えていただいたことを私たちが未来の子どもたちにつなげる役目を担っていきたいと感じるようになりました。このような背景から、地域課題解決と地域活性化を目指したスマイルストーリーの活動は始まっています。

私たちは、「新潟の自然環境を考える活動」、「新潟の子どもを育む活動」、「新潟に笑顔を増やす活動」の３つの柱を中心に、地域、学校、団体、企業と連携し地域課題に対する様々な取り組みをしています。

◆「新潟の自然環境を考える活動」

西区と西蒲区を通る新川を「核」「テーマ」とし、地域と地域、川と海がつながる清掃活動をＰＲすることで、流域全体で河川愛護の醸成やごみの不法投棄防止に向けた啓発に取り組んでいます。

五十嵐浜の海岸清掃に参加のボランティア

また、海洋ごみ問題、生態系破壊に対する問題を未来永久に残さない身近な取り組みとして、毎月１回年間 12 回、地元五十嵐浜の海岸清掃スマイルクリーンを開催し、地域内外の人たちに海の環境汚染に向けた啓発に取り組んでいます。

五十嵐浜の海岸清掃で毎月これくらいのゴミが出ます

◆「新潟の子どもを育む活動」

厚生労働省が発表した「平成 28 年国民生活基礎調査」によると、日本の子どもの相対的貧困率は 15.6%となり、７人に１人が貧困状態と言われています。

また、相対的貧困率の 15.6%のうちの半数がひとり親世帯であることがわかっています。

私たちは、子どもの貧困格差対策、親の子育て支援、フードロス削減に対する取り組みのひとつとして「さくら食堂」という子ども食堂を開催しています。

子どもたちと餅つきをやりました

ここでは、様々な環境に置かれている子どもたちを笑顔にする活動の他、フードロス削減法に習い、規格外食材を活用した「規格外お弁当シリーズ」を作り、食材費のコストを下げることと、生産者の廃棄率を下げることを目指します。新川漁港の未活用魚も使わせていただき、子どもたちに旬で新鮮な食材を食べてもらうことも大事にしています。

新川漁港の漁師さんよりいただいた未活用魚

また、内野小学校の特別支援学級のサポートや、不登校児童に対する多様性のある学び方を地域の事業者と一緒に考え発信し、誰も取りこぼさない社会を地域で構築することも目指しています。

◆「新潟に笑顔を増やす活動」

子育て支援、学校支援、地域の魅力創出と発信など、様々な団体や企業と連携しながら新潟の人を笑顔にする活動をしています。また、個人や事業者の悩み、企業のＣＳＲ向上に向けた相談業務も行っています。

寺泊の未利用魚で開発した魚天バーガー

何者でもない主婦の私たちがこの地域で活動するにあたり困難はたくさんありました。しかし常に諦めず、粛々と淡々と世のため人のためにという思いを捨てず活動してきたことがようやく実り始め、様々な場面でたくさんの人たちと連携できるようになりました。

規格外のカレーと同じく規格外のコロッケ弁当

新川開削の精神が根付くこの内野町で、未来につながる笑顔のために、個と個をつなぎ、地域課題解決をしながら地域の魅力を創出し発信できることに感謝しかありません。これまでたくさんのことを教えてくださった越後新川まちおこしの会の皆様に、改めて深く御礼申し上げます。

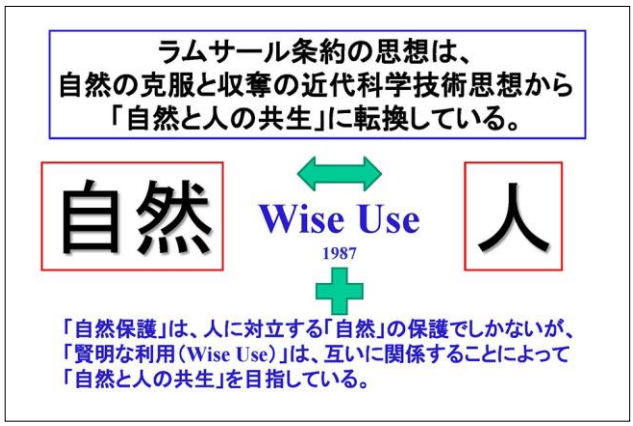
ラムサール条約湿地自治体認証記念シンポジウムに参加して

会員　藤原 治郎・恂子

2 月 5 日、ラムサール条約湿地自治体認証記念シンポジウムに参加し、湿地帯都市としての重要さと大切さを再認識し、感動した 1 日でした。

2～3 年前までは、「瓢湖」と「佐潟」がラムサール条約に認定されていたのに引き続き、「福島潟」と「鳥屋野潟」を申請して居て、認定される可能性は充分あると聞き及んでいました。

今回は「ラムサール湿地自治体」と言う形での認証に少々戸惑いましたが、今迄よく「水の都 新潟」と言われて来ましたが、私は「潟の都　新潟」が相応しいと思っていましたので、今回の認定は正に新潟市には「ピッタリ」の表現の認定であると喜びが増しました。



当会の大熊顧問が語りかけた「自然と人との共生」

私達が「潟」に親しみを持ち始めましたのは、2015 年に新潟市主催で開かれた「水と土の芸術祭」に参加した事から始まります。「水と土の芸術祭」では、「映画製作プロジェクト」に参加した事がきっかけで、「鳥屋野潟」へ足しげく通い、「水と土の芸術祭」を通して他の「潟」へも通うようになりました。

「水と土の芸術祭」では、「潟」をメインフィールドとして数多くのアート作品を展示、「福島潟」を始め、「鳥屋野潟」、「信濃川」の畔、「海岸通道」の公園、「佐潟」、「上堰潟」等々、数多くのアート作品が展示され、大いに楽しませていただきました。

また、翌 2016 年度は「潟巡りスタンプラリー」を実施していただき、16 の潟のそれぞれの個性有る特徴を知り、潟が大好きになりました。

2015 年水と土の芸術祭の作品「バンブーハウス」

近年の我家では、妻と二人で「潟巡り」に妻の手作り弁当を持参し、春は桜並木と菜の花畑、夏は蓮の花、秋は紅葉とギンナン拾い、冬は白鳥の優雅な姿を愛で、一年を通じ楽しく心を癒していただいています。

こんな状況での今回のシンポジウムは、各パネラー様の報告より、湿地帯では一年を通して維持、管理の大切さを学び、特に夏場の使用が最も重要で、「田んぼ」では、農薬の使用を控えるようにし、例えば「田んぼ」に鯉を放ち水草や害虫を食べてもらったり、水鳥を放ち同様の効果を得たりして、冬場の「渡り鳥」の餌場の確保とし、潟のボランティアの方々による清掃、維持管理等で、休息や塒（ねぐら）となり、本県への渡り鳥の飛来数が日本一である事を知り、湿地帯の重要さを再認識させていただきました。

シンポジウムは満席であった

今回のラムサール条約湿地自治体認証を契機として、市民の皆様にも親しんでいただき、湿地帯の重要さと大切さを理解し、各種イベント等を通じ、湿地帯を楽しめるような企画をしてほしいと思います。

「20年前の西っ子が語る 200周年の新川」「西内野の今昔」

渡邉 宏海

昨年2022（令和4）年10月14日の午後に、母校の西内野小学校で、ゲストティーチャーとして４年生の子ども達への出前授業をしてきました。講演の題名は「20年前の西っ子が語る 200周年の新川」です。

そのきっかけは昨夏の踏み車体験のスタッフをしていた日でした。西内野小（以後、西小）４学年の学年主任をされている小林先生が、社会科の単元である地域学習の下調べのためにご来場されました。子ども達が10月28日の校外学習で新川などを訪れるに当たって、事前に地域の人の解説を聞いて臨みたいとのこと。それならば卒業生である自分が良いのではということになり、お話をお請けしました。

半端ながらも教職課程をかじった者としては、再び子ども達の学習の場に立つという巡り合わせに感慨深く思うとともに、子ども達のわずかな時間を半端にはできないと気を引き締めました。

さて授業づくりですが、新川についてのプレゼンは少ないながら経験がありました。その時の聞き手は職業訓練生（と指導員）で、みな義務教育を修了しているという点では今回とは少々違いがありました。

しかし公民館での講演と違い、地域の歴史に対する聞き手の関心に関わりなく話をすることや、大多数が新潟県外の出身であり地理感の無い話であることなどの条件は、社会科を学び始めてまだ2年目である子ども達の状況に通ずるのではないかと思いました。そこで今回のプレゼンでは、新川の部分については当時用意したスライドを再利用することとしました。

授業の導入かつ自己紹介として、越後新川まちおこしの会としての活動（講演会やゴミ拾い、休止中の生き物調査や水上体験）の紹介をすることにしました。

また、子ども達と同じ西小の卒業生として親しみを持ってもらうため、自分の小学生時代の学校風景や、通学路や自治会・町内会として馴染みのある西内野の「今昔」を語ろうと思いました。

しかし灯台下暗しと言うか、自分の生まれ育った西小の校区内のことについては、隣の校区である内野町の方よりも知識に乏しいのでした。そこで改めて、本格的に西内野の歴史について調べることにしました。

まずは図書を当たりました。新潟市立図書館の蔵書検索で「西内野」と検索すると、『内野の今昔（創刊号、第九・十三・二十号）』がヒットしました。「隣の校区にしては結構あるな」と一瞬思いましたが、西小自体が内野小のマンモス校解消として出来た経緯を思い出してすぐに納得しました。

特筆すべきは、筆者が在学中の2002（平成14）年に発行された第二十号において、当時の小学校長をされていた五十嵐寛先生の『西内野小学校の開校』です。この年に新任として来られた五十嵐先生が、西小を深く知るため調べられた学校の沿革がまとめられています。その他にも例えば、中浜団地（新中浜）の児童はかつて内野小ではなく木山小に通学していたのが、より近くに出来た西小に通うようになった、といった出来事なども記されています。

また創刊号の『長潟史話』、第九・十三号の日東紡績内野工場に関する話も、知る人ぞ知る西内野の歴史です。この場をお借りしてご紹介します。

また、授業まで1ヶ月を切った9月に小林先生との打ち合わせのために西小を訪れた日では、放課後の予定の時刻までの時間に西内野の校区内を歩き回り、上新町集会所や平和台の丁字路、小丸山公園などにある石碑を巡って写真に収めたり、電柱にある東北電力やNTTのプレートを見て回ったりしました（右の写真には「上平和台線」や「上新田幹」とあります）。

この調査からは、地域の開発に関わった人々による地域の捉え方が推察できます。北陸自動車道用採土跡地の圃場整備や、新潟地震被災者の救援あるいは都市計画による団地の

建設など、住み良い地域へと変わってきた経緯を刻む地元の有志。また、業務として整備するインフラの路線に古い地名や新しい団地の名前などを割り当てる業者。

団地によっては、恐らく住民が愛着をもって名付けたであろう通りがあります(写真では「中浜中通り」)。その名前の付け方にも、その時代々々の風潮が表れているように思います。

ここまでの調査で、西内野を捉える視点はいくらか得られました。ただそれらの情報は、子ども達には学習段階も時代感覚もまだかなり遠いので、もっと近いものを用意しなければなりません。「授業の準備に１０調べたとしても、子ども達に出せるのは１だ」という、大学の教授の言葉を今一度実感させられました。

小林先生との打ち合わせの後、プレゼンの資料探しとして最後に向かったのは実家でした。自室に保管してある 2004（平成 16）年度の卒業アルバムから、現在の校舎や周辺の景色とは違う写真を探しました。

例えば校庭とグラウンドの間に新設されたプレハブ校舎は、自分の時代にはありませんでした。自分の小学校高学年頃から内野西が丘駅周辺の新興住宅地が広がり始め、若い世帯が新しく入ってきました。幼少期からそこで育った子ども達が次々と進学し、従来の校舎では教室が足りなくなったことから、約 10 年前にプレハブ校舎が新設されたとのことです。

そう大昔の事でも無いながらも、いま現在の子ども達にとって当たり前の風景を通して見た違和感。その刺激によって社会科的なものに興味を持ってもらえれば、ゲストティーチャー冥利に尽きます。

小林先生との打ち合わせの中で、子ども達に「なぜ社会科を好きになったのか」を話してほしい、という要望がありました。教科として社会科を楽しく感じ始めたのは小６の歴史分野で、地理分野は大学入試の地歴選択で日本史Ｂを選んだため学習としては疎かになっていました。しかしよくよく考えると、小１の生活科で登下校ルートに無い地域を歩いたり、西小の校区の末端にある自宅まで様々な道を寄り道して下校したりするのが楽しかったので、子ども達には「僕の社会科好きの原点は散歩です」と話しました。

授業当日、有り難いことに子ども達の反応は良かったのではないかと思います。後ほど頂いた感謝状を読ませてもらうと、「昔の西内野は畑だった」というのが印象に残った、という感想が多くありました。「昔から今へとつづくまちづくり」という単元へのアプローチにはなったと思います。ただ、肝心の新川に費やす時間が少なくなってしまったのは反省点でした。

そして授業の終わりに、自分が事故で生命をさまよい、現在も障害を負っているという話をしました。４年生は 10 歳を迎える時期で、「１／２成人式」としてこれまでを振り返る道徳の授業で心のバリアフリーについて学ぶ時期でもあります。世の中には、他の人から見えやすい見えづらいに関わらず何かに困っている人がいるので、心を配ってあげてくださいと伝えました。

そして、登下校など外を歩くときは交通安全に努めてくださいとまずは伝えつつ、この先の人生で困りごとが出来たら、自分だけで頑張らずに他の人にも助けてもらいましょうと伝えました。

困難は別の手立てで解決し得る、というのが自分の経験であり、新川の歴史からの教訓でもあります。

西内野小学校４年生より届いた感想文

にいがた総おどり 見聞録

会長　山中 清蔵

令和４年９月 18 日夕方、『新潟総踊り』の万代十字路会場に行きました。観客を入れての開催は３年振りです。

各団体の演舞の後、永島流新潟樽砧伝承会、新潟万代太鼓の独演が終わり、表彰式がありました。

最初は、新潟商工会議所賞を福田会頭より「REDA 舞神楽」（千葉）、次に新潟市長賞を中原市長より「早稲田大学“踊り侍”」（東京）、最後に新潟県知事賞を花角知事より「IZANZI 北海道“すながわ夷”」（北海道）に授与されました。

「新潟総踊り」を見ようと万代十字路を埋め尽くす観客

受賞に当たってのコメント、千葉より新潟総おどりに初めて参加して賞に預かり感謝していた。札幌のＹＯＳＡＫＯＩそうらん踊りより転戦組との事。

早稲田大学は 100 人以上の団体で、リーダーは女性で、奥のほうはよく見えなかった。

最後の砂川えびすは我々隣で観客席にいて、自分達の名前を呼ばれ、代表の女性はかなり慌てていた。受賞のコメントに「私たちは、2002 年より欠かさず参加して 21 回目で初めて栄冠に預かり感動した」との事でした。

受賞団体が再度演舞の披露となり、滝川市から来た若い人を呼び集めるのに四苦八苦していました。

もう一人付添いでいた新潟の人は「響連」の会員で、私が振り付したと言ってました。この「響連」が全国各地に支部をもうけて、総踊りの普及に努めたと聞いてさらに驚きました。

『新潟総踊り』について

高松市「さぬき高松まつり」の１日を総踊りとして、「おどり連」募集して開催、

第 55 回目となり、これをルーツに札幌で YOSAKOI ソーラン祭りとなり 31 回目。にいがた総おどりが３代目と思っていましたが、世間的には、３代目はどこか、探しているようです。

高松は民謡中心、札幌は、基本ルールはたった２つ、

①手になる鳴子を持つこと

②曲にソーラン節のフレーズをいれることとある。

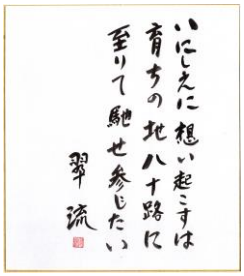
それに対して、ルールは『心をこめて踊ること』この祭りはどんなジャンルでも、だれでも自由に参加できます。目指しているのは「日本一心躍る、オールジャンルの踊りの祭」「全国、海外からも踊り子が新潟に集い感動の渦に巻き込み、新潟から世界へ、現代から未来へ」そして次の世代の子どもたちへ、感動と持続可能な未来を届けるために、みんなの手でつくる祭りです。

そして、にいがた総おどりの中で、重要な位置を占める、永島流新潟樽砧伝承会の存在も欠かせないものになっていると思います。

新潟樽砧永島流 初代永島鼓山さん

この度、６ 年の空白期間をへて、２ 代目、永島鼓山が、新潟元市長篠田さん初め、新潟大学名誉教授松浦さん等の肝入りで岡澤花菜子さんが 12 月９日に襲名することになり、喜ばしい限りです。

31 回目の YOSAKOI ソーラン祭りは観客数 200 万人との事、高松、札幌と広い会場があるのに、新潟は 25 万人が精一杯です。もう一つ、参加料が高い中学生以上一人 3,000 円（？）高松１連 5,000 円、札幌不明。いずれにしても、志の高さでもって、これらのハンデを乗り越えて、多様性のある「にいがた総おどり」を盛り上げていきたいと思っております。



笹川 悦夫氏 作品

『老梅倒る』～新川の流れを眺め続けて50年～

フリーライター　古俣 慎吾

新川と道行く人々を眺め続け

「おーい、梅の木が倒れているよ」

2022 年 12 月の早朝、隣家の山田さんから声がかかった。あわてて裏に回ってみると、新川端の道路をふさぐように、３メートルほどの梅の木がドシンと横たわっていた。どうやって片づけたらいいのか、一人でできるのか。考えているうちに、近所に住む従弟や隣家の人たちがノコギリ片手にかけつけてくれた。胴体を切り、枝を落とし、あっけなく整理は終わった。

家の周りには梅が３本あった。今回倒れたのはその中でももっとも大粒の実をつける親分肌の梅だった。私たち３兄弟が進学で家を離れた後に両親が植えたもので、樹齢は 50 年ほどだろうか。その間、ずっと新川の流れと道行く人々を眺め続けてきたことになる。

智恵子の梅酒には遠く及ばず

実家に戻った 12 年前の３月、おびただしい梅の花が咲くのを見たとき頭をよぎったのは「しめた、しこたま梅酒が作れる」という思いだった。

６月。春先に咲いた花は青梅となった。その成長の速さは驚くべきものだ。収穫した青梅は予想以上の量となり、８リットル容器を４つも準備しなければならなかった。容器に梅を入れ、氷砂糖と焼酎を注ぎながら「どんな味になるのだろうか」と胸を踊らせた。

高村光太郎の「智恵子抄」の「梅酒」には、「智恵子が造っておいた瓶の梅酒は、十年の重みにどんより澱んで光をつつみ‥‥」とあったが、とても 10 年なんか待っていられない。

まだか、まだか‥‥。９月頃からちびちびと味見をしながら盗み呑みをくり返しているうち、本格的なでき味を堪能せぬまま半年で呑み尽くしてしまった。

自然を包み込んだ梅干しの重み

翌年は、梅干しに挑戦した。こどもの頃、母が毎年つくっていたが、具体的なつくり方はネットで調べた。１年分の 400 個を梅干し用に、あとは梅酒に回した。

８月の天日で１日干したあと、夕方、容器に戻すと、液体の色彩がさっと変わるのも母がつくっていた頃の記憶と重なった。施設にいる母のもとに持っていった。私がつくったというと「大丈夫か」という表情を見せたが、「どうらね？」と訊くと、「おれ（私）がつくったのとおんなじ味ら」と満足そうに答えた。

うまく干仕上がった梅干し

７年前、梅酒を仕込む頃に母は逝ったが、梅酒と梅干しづくりは続けた。そのうち、梅干しは紫蘇を使わず、塩だけで漬けるようになった。梅酒も、じっくりと２～３年は寝かせられる余裕も出てきた。

梅にも「生（な）り年」とそうでない年があるようで、ここ数年、収穫量が目に見えて減ってきた。３年前には 200 個となり（梅干し）、２年前には６個しか実をつけなかった。歳をとったのだろうが、こまめに手入れをしてこなかったことがもっとも大きな原因だろう。昨年は私自身が体をこわして仕込みができず、昨年の師走、ついに寿命を終えたのだ。

手元に３年前につくった梅干しが 10 個ほど残っている。シワが寄って頼りなさそうに見えるが、太陽のエキスを包み込んで、市販ものにはない存在感がある。口に含むと、脳天の後ろがズシンとどやしつけられ、ひたいから首筋にかけてドワッと汗がわいてくる。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

残った梅の木に今年も花が咲いた。梅酒には十分だが、梅干しにできる大きさに育ってくれるだろうか。

『引揚者』

会員　清水 茂子

「引揚者」という言葉をご存知の方はもうほんの僅かになったでしょう。

私は、戦時中北朝鮮で生まれました 。父は軍需工場に勤務していて、父母と姉５人、妹が１人の９人家族でした。

当時、家には他に若い女性が二人、時々訪ねてくる若い男性が二人居ました。私達は二人の女性を「しいねえちやん」「ちいねえちやん」と呼んでいました。彼女たちは家事を手伝っていましたので、私はお手伝いさんかと思っていましたが、敗戦直後工場で働いていた若い工員さん達の危険を避けるため、各家庭で預かっていたとのことでした 。

終戦時私は３歳でしたのであまり多くのことは覚えていませんが、姉から聞かされたところ、彼女達は国策で連れて来られたのだから無事に故郷に返さなければならないと、工場で働いていた何人かの主だった人達が相談し、若い女性、お年寄りのいる家庭など引き上げの順番を計画的に行い、日本に返したとのことでした。

私達家族は最後のグループとなり、昭和 21 年夏に帰る事になりました。夜間、「闇船」で南の引き上げ船のいる現在の韓国の港まで、男性は甲板に伏せて、女性と子供は船底に周囲に見つからない様に乗りました。私は４歳になって少しずつ周囲の状況も理解していたのか、フイルムの一コマ、一コマ印象の強い部分を記憶しています。船底は暗く、船が揺れるたび、底にたまった水が、ザー、ザーと流れてくるのを覚えています。多分そこは魚を入れる場所ではないかと後に考えました。

南の港町でひと月引上げ船を待ち、ようやく船に乗る事が出来ました。夜、2 段ベットの上に寝ていた 2 歳の妹が激しく泣いていたため目をさますと、隣に寝ていた女性の足が小さな妹のお腹に乗っています。その大きな足を下ろして寝ましたが、朝になると妹が息をしていませんでした。

妹は 2 歳にもならず母の母乳も出なかったので、元々十分な栄養も取れず栄養失調でしたので、天命だったと言えるのですが､私にはその女性の大きな足が、今でも憎らしく思えます。幸いなことに、船の上で火葬にしていただき、お骨として連れ帰ることが出来ました。

博多に上陸して列車に乗り、東京経由で新潟まで来たそうです。「東京の一面焼け野原の状態を見るのだ」と父が言ったとか、姉から聞きましたが、私はその間の記憶が何もありません。

新潟に着き、新潟高校のグランドで一晩野宿し、県庁で住まいの斡旋を父が交渉したのだと姉から聞きました。山ノ下の引き上げ住宅を斡旋され、そこまで歩きました。

家の近くまで行った時、近所の農家の方が私達姉妹に大豆や栗を下さいました。私は上着のポケットに入れて貰い、とても嬉しかったことを覚えています。後でそのポケットは、3 センチ程の小さなものと分かりましたがその時の私には、ポケットに【いっぱい】でした。歩いている時、多分殆ど何も食べていなかったのだと思います。

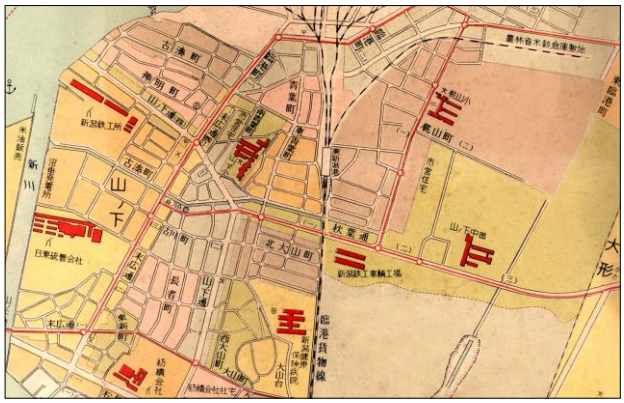
ぞろぞろと６人の子供が力なく歩いていて、気の毒だと思われたのでしょうけれど、食料のない当時、めったに出来ることではありませんよね。

その農家の方には、その後も随分お世話になりました。母は北朝鮮を出る時に、自分の帯の芯で、子供たち一人ひとりの体格に合わせてリックサックを作ってくれました。多分食べ物を入れていたのだと思いますが、途中ですっかり無くなっていたのでしょう。

ここで戦後の生活が始まりました。近所はみな同じような人たちで、男の子は高校生から未就学児まで、朝から晩まで、外で遊んでいてそれはそれは、賑やかなものです｡女の子は年齢の近い子で遊んでいました。

75 年も経って、すっかり日本の状況も変わりました。物質的には確かに豊かになりましたが、人々は幸せでしょうか？

かの地では、戦争が続いています。地震で多くの人が家を失いました。まだ瓦礫の下に人がいます。



昭和 26 年の山ノ下地区の市営住宅

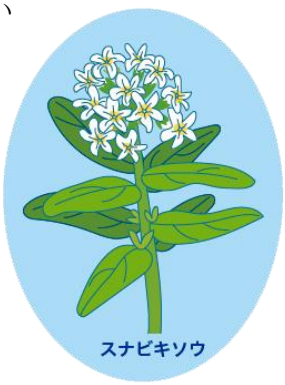
『札幌の話』

会員　安富 佐織

2019 年春に長年お世話になった内野から県外（茨城県水戸市）に引っ越しました。新潟を離れてもうすぐ丸４年です。離れてますます新潟のありがたさをしみじみと感じました。

内野は海が近かったから、時々海が見たいと思うと浜を歩くこともありました。今はそれもできないので、パソコンの壁紙に貼り付けた内野の浜の海の写真を眺めています。

春から夏に入れ替わりながら、浜辺には、他では見られないいろんな花が咲いていました。春から初夏に白い花が集まって咲くスナビキソウは良かったなあ。他にもハマダイコン、夏に黄色いタンポポのような花が熱い砂に埋まるように咲くハマニガナ、紫色がきれいなハマエンドウもいいですね。



新潟の食べものも、季節ごとに思い出されます。魚、酒、里芋、かきのもと、酒粕、枝豆、車麩、内野小学校周辺に生える細いタケノコ、、、いいなあ。特にお魚は、どこのスーパーでも丸ごとの魚を買ってきてお刺身で食べられるのが新潟の、内野の幸せですよね。内野で買うと、アジもカナガシラもコウグリも、とても安くてとてもおいしい。最高でした。

県外へ引っ越してからしばらくは、お魚を買っては「何だかおいしくない」の繰り返しでした。その土地その土地でのおいしいもの、おいしい食べ方は違うということですね。水戸ではスーパーの納豆売り場がやたらと広いし、納豆の種類も多くて、ドライ納豆などもおいしいですが、シンプルな納豆がやはり最高においしいと思います。私は、２０代の初め頃まで納豆が苦手でおいしいとは思えなかったのですが、水戸納豆を初めて食べた時おいしいと思ってびっくり。その一回で納豆嫌いをスッキリ卒業した経験があります。

最近は札幌にご縁があって、札幌の食べ物も研究中です。息子が札幌に住んでいた頃から少しずつ研究を始めて今に至ります。じゃがいもや牛乳、洋菓子などおいしいと思うものは多いのですが、つい最近知ったのがひなあられです。

左が北海道のひなあられかりんとう　右は普通のひなあられ

何か普通のおせんべい、がどうしてひなあられの袋に入っているの、と初めて見た時には思いましたが、なんと、札幌ではひなあられはかりんとう！それが普通なのだそうです。びっくりしました。すごく食べ応えがあってこれはこれでとってもおいしい。私の知っているお米のひなあられとはまた別のおいしさでした。

３月３日のひな祭りの頃は札幌はまだ写真のように、たくさん雪が積もっていて「桃の節句」という感じではありませんが、やはりひな祭りは春の華やかさがあっていいものですね。

新潟市の積雪と較べようがない（筆者）

札幌で川に関係ある話を最後に無理やりひとつだけ。最近の札幌は、市街地にまでクマが出現して時々ニュースになっていますが、同じ札幌市でも、クマが出る場所は、すみかがある山に近いところだけではなく、川沿いに移動した先だということです。大都市の中の護岸された川でも、草が茂ってある程度の丈があると、隠れるところがあって安心して遠くまで移動できるということです。

だから、クマが川沿いに移動しないように、草を刈って見通しを良くするのです。この頃は温暖化のせいなのか、冬眠しないヒグマがある程度いるというのも驚きです。それでも何とかして、人間とクマが平和に棲み分けて、共存し続けることを願っています。

参加団体の皆さんが協力した第４回新川音楽祭

新川音楽祭実行委員長 佐藤 正人

秋晴れの、令和４年 11 月 12 日 10 時から内野まちつくりセンター3 階ホールに於いて、第４回新川音楽祭が開催されました。

初めに主催者代表として小泉利男 内野・五十嵐まちつくり協議会会長よりご挨拶を頂きました。参加団体は 14 団体で､バラエティー富んだ幅広い音楽が集まりました。

トップバッターの西内野コミ協吹奏楽団

内野小学校のブラスバンドや西高校と西内野コミ協の吹奏楽団また新潟大学生クレシェンドの演奏やギターサークルとアンサンブルまた合唱団や歌声サークルかと思えば、三味線の音が響く越後ごぜ唄も！今度は民謡と舞い踊り、最後は内野の盆踊りで大きな輪が広がりました。入場者は 455 人弱で新潟市内はもとより、県内外から来ていただきました。またすべての団体の映像が YouTube 配信され日本全国の方々から視聴して頂きました。

２団体目の内野ジュニアブラスバンド WISH

新型コロナの影響も心配されましたが、参加演奏者や入場者全員の名簿と体温チェックを実施した結果、心配された新型コロナの影響も見られませんでした。これは実行委員会の皆様とスタッフや関係者の皆様方の努力の賜物だと心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

この音楽祭は､平成 21 年に当会の事務局長であった故丸山幸平氏（元新大農学部教授）の発案により、新川の流れを見ながら悠久の刻に想いをはせながら越後新川まちおこしの会が、主催して静田神社境内で「第１回 新川野外音楽祭」として内野地域の音楽愛好家の発表の場所提供により、地域の方々が共に楽しみ、共に語りあえる場を提供することを目的に始まりました。

その後、平成 27 年の第 7 回まで静田神社で開催されましたが、天候・設備などの諸事情から２年間休止した後、新たに完成した内野まちづくりセンターの屋内ホールに移り令和元年 11 月に「第１回新川音楽祭」として再出発しました。

地元の内野盆踊りの会

出演者も多様化、増加して現在に至っております。今年は出演者の増加から午前から午後まで、ほぼ１日を要するまでに発展拡大しましたが実施共催団体の「越後新川まちおこしの会」の高齢化により実行委員会方式を今年度から取り入れ、出演者が主体になって実施してゆく方式に変えて今回の音楽祭となりました。

また新川音楽祭が多様な音楽分野による多くの参加者にて開催されることは、大きく発展する過程であり、大変よろこばしいことであるとともに､「新川音楽祭」は、内野地域の音楽愛好家の『発表の場所』とすることにより、地域の方々が共に楽しみ、共に和やかに語りあえる場となり、新川音楽祭が地域の皆様から親しまれ、愛されることを目的に演奏者との実行委員会形式で開催し、地域の音楽祭として、開催すべきとの意見を元に地域の音楽愛好者を主体に地域の皆さんが楽しんでいただく音楽祭とする。しかし地域外の多様な分野の出演者の参加希望を拒むものではないことを実行委員会の全員が共通認識し､「新川音楽祭を継続して開催する」ことを基本方針として進めて行きたいと思っております。これからも地域の皆様方からのご理解とご協力を頂きながら「新川音楽祭」を継続して進めていきたいと思いますのでご支援ご協力を宜しくお願い申し上げます。

第4回「新川音楽祭」から「過去から今、そして未来を念う」

世話人　髙橋 智恵

今年の新川音楽祭は、内野・五十嵐まちづくり協議会が主催、越後新川まちおこしの会、西地区公民館の共催で11月21日(土)、内野まちづくりセンターのホールで開催された。今年の開催に当たっては、出演団体も一緒に音楽祭を作り上げるという趣旨の元、実行委員会が結成され、佐藤正人会長、高井悦成副会長のもと、8月から通算4回の実行委員会を経て、新川音楽祭当日を迎えた。

新川音楽祭を聴きにこられた方々

実行委員会では、演奏時間、出演順、当日の役割分担、控室の割り当て、団体の入れ替え方法、などなど細部まで話し合いが持たれた。各団体からの要望を出演者同士で調整し合いまさに、出演者全員で作り上げる音楽祭となった。出演団体が15団体（当日は1団体が残念ながら出演不可となり 14 団体の演奏であったが)、幅広い年代の（小学生、高校生、新大生、新潟樽砧太鼓の後継者となる若者たち、そして合唱や民謡、ギターを愛する方々）出演者の演奏がホールに響き渡った。

当日までは大変なことも多かったが、演奏後の出演者の表情はとても晴れやかだったことが印象に残っている。また司会をしながらも、観客席からの楽しい様子が伝わってきた。何事も最初にアクションを始める時は困難が伴うが、実行委員メンバーの、どうしたら実行できるのか、やってみてはどうか、というひらめきと柔軟な対応が今年の音楽祭を成功に導いたと感じている。

ご存知の通り、新川音楽祭の前身は、丸山幸平先生のアイディアと当時の会員の皆様の行動力で実行可能となった新川野外音楽祭だ。新川で子どもが溺れないことを祈願して建てられ、新川のほとりに鎮座し、明治・大正・昭和・平成、そして令和と時代の変遷とともに新川の歴史と内野町を見守ってきた静田神社で、平成21年の春に第1回が開催された。

私が内野に移ってきたのは平成 26 年なので、残念ながら静田神社での新川音楽祭を体感したことはない。第1回新川野外音楽祭の開催に尽力された丸山先生にお会いする機会がなかったことも残念である。新川への念い、音楽祭への念い、地域づくりへの念い、次世代への念い・・・いろいろなことを丸山先生からも直接お聞きすることができたら、どんなに有意義で有難い時間になっただろうか。

第1回新川野外音楽祭は小雨の中で行われた

今回、過去の新川通信に目を通し、誌面から第1回の野外音楽祭開催までの経緯やご苦労を改めて知ることとなった。越後新川まちおこしの会を立ち上げ、新川や内野のために様々なチャレンジに挑んだ人生の大先輩に対して、大変失礼ではありながら、とても親近感を覚えた。そして、私にも新川のほとり、新川を見守ってきた神社での、地域住民の交流が3D 想像のように浮かび上がってきて、とても心躍る情景にワクワクしてしまった。ぜひ、新しい形で静田神社でのイベントを復活させようという熱い思いが湧き上がってきた。

越後新川まちおこしの会の仲間に入れていただき、ここでの活動がきっかけとなり綱本麻利子さんと一緒に立ち上げた一般社団法人スマイルストーリーは、現在、河川財団からの助成金を得て、微力ながらも新川を中心とする水環境整備、保全に携わっている。

第3回新川野外音楽祭は新緑の静田神社で行われた

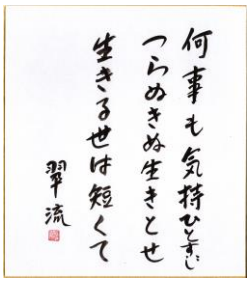
この助成金申請で５年間の計画書を提出した際に、「新川文化祭」の開催を計画に入れ込んでいた。新川を題材に、写真でも美術作品でも、短歌や俳句でも、何でも作品を募り、新川や地域への愛着を、世代を超えて根付かせていきたい、という川を中心とした地域づくりへの一つのアイディアだった。

第４回の新川音楽祭は 14 団体が参加して開かれた

音楽祭のことが頭によぎったのか、ひらめきだったのか、今となっては覚えていないが、その根拠のなかった計画も、実はとても素晴らしいアイディアだったのではと今なら自信を持って思えるようになってきている。折下、中山さんの文芸の里で、内野での豊かな文化が生まれる背景をじっくり学ぶこともでき、自然から情緒豊かな内面が育てられることも実感したこの数年間､そして静田神社でのイベントを復活させたい、という自分の中の「点」でしかなかった一つ一つの念いが、つながっていくイメージを持つことができた。

越後新川まちおこしの会を立ち上げてくださった諸先輩方の念い、そして今私たちにできること、未来につなげるような役割をこれからも担っていきたいと、今年の新川音楽祭の音楽を改めて聴きながら今後の展開を思い描いてみた。

無鉄砲で無謀に思える私たちの活動を、いつも支えてくださる地域の皆様、越後新川まちおこしの会の会員の皆様への感謝を忘れることなく、今後も「自助・共助」の精神で頑張っていこうと、この原稿を書きながら、新川がつなぐ過去と今、そして未来を念い描いてみた。



笹川 悦夫氏 作品

編集後記

小泉 勇

今回も９編の執筆ありがとうございました。

巻頭言の綱本 麻利子さんは、一般社団法人 スマイルストーリーの設立からゴミ拾い､子どもを育む活動、笑顔の社会実現など具体的な活動に、拍手を送りたいと思います。

藤原 治郎・恂子さんご夫妻は、２月５日に開催された｢ラムサール条約湿地自治体認証記念シンポジウム｣に参加され、新潟の潟への想いを語っていただきました。この、｢潟の都　新潟｣は、今期の総会の講演で大熊新潟大学名誉教授が取り上げます。詳しくお話が聞けます。楽しみですね。

渡邉 宏海さんは、母校への出前授業で下調べの途中新しい発見があり、彼の記事は、毎回納得です。

古俣 慎吾さんの老梅は、12 年前に実家に戻り梅酒の奮闘が快い思い出です。医者から酒は、止められていないので、少し太り元気そのものだそうです。

清水 茂子さんからは､『75 年も経ってすっかり日本の状況も変わってしまいました。物質的には、確かに豊かになりましたが、人々は、幸せでしょうか？かの地では、戦争が続いています。地震で多くの人が、家を失いました。』と、まだこの文章は、終わりそうもない勢いです。続きの原稿も読みたく期待しています。

安富 佐織さんは、現在は、県外に住んでいますが、4 年前まで新潟におられました。折々に触れ、思い出すそうです。最近では、市内にクマ出没と怖い話でくくっていますね。

佐藤正人さんと高橋智恵さんは、第４回の新川音楽祭について述べられており、ご苦労様でした。

新川通信-16 号　　年 1 回発行
（現在会員数 96 名）
●発　行：越後新川まちおこしの会
●事務局：新潟市西区内野山手 2-18-8-6
小泉　勇
電話・FAX 025-261-0235
E-mail：iikoi@r6.dion.ne.jp

入会案内

本会は、新潟市内を流れる西川と新川の立体交差などの近世･近代文化遺産とも言える、新川の歴史およびその流域で育くまれた産業や文化について理解を深め、その環境保全につとめながらさまざまな活動を通じて、流域および周辺地域のまちおこしに寄与することを目的に平成 19 年 2 月に発足しました。
年会費 1,000 円です。ご入会をお待ちしています。